

Musikalische Zeitfragen (1903) にみられる音楽育成の特徴

—クレッチュマーのVolk概念に着目して—

工藤千晶

(美作大学)

Characteristics of Music Cultivation Observed in *Musikalische Zeitfragen* (1903): Focus on Kretzschmar's Concept of "Volk"

Chiaki KUDO

Abstract

The principal aim of the present study was to elucidate the characteristics of music cultivation in Kretzschmar's work *Musikalische Zeitfragen*. Through an examination of Kretzschmar's concept of "Volk," the present study examines who was asked to be musical, what challenges they faced, and how improvements were attempted. The investigation revealed that Kretzschmar called for all German "Volk," including "educated persons" and "the masses," to be musical. Kretzschmar presented vocal music focused on the common goal of loving "music as an art of service" among the entire "Volk" of Germany, thereby setting "educated persons" a lofty task. In the reform of Kretzschmar, which sought to have "Volk assume the responsibility for German music art," the role expected of "Volk" can be considered to have differed depending on the social group to which a person belonged.

I 研究の背景と目的

19世紀後半から20世紀初頭のドイツで行われたクレッチュマー (H. Kretzschmar) の改革は、今日のドイツの学校音楽教育の確立に寄与した改革であるとともに、社会一般における音楽育成の制度的、内容的な整備を進めた改革である。

クレッチュマーの改革のうち、学校音楽教育に着目した先行研究では、クレッチュマーの改革によって学校音楽教育の制度的な見直しが行われたこと、音楽授業の免除の廃止が要求されたこと、個々の学校種の新たなレールプランが提示されたこと、およびそれによってどのように音楽授業の内容が変化したかなどが説明されている (Kafurke, 1945/Braun, 1957/Nolte, 1975/Pfeffer, 1992/Freitag, 1998/Heller, 1998) ¹⁾。

次に、社会一般における音楽育成に着目した先行研究では、クレッチュマーが「合唱協会」や「音楽協会」、「コンサート協会」を音楽育成の重要な柱にしたことなどが説明されるとともに、クレッチュマー主催の「歴史的コンサート」や「国民楽派コンサート」のプログラム構成やプログラム解説の特徴なども明らかにされている (Sommer, 1985/Böhme, 1998/上山, 2005) ²⁾。ここでおさえておきたいのは、バッハ協会をはじめとする「真面目」な「協会 (Verein)」や、過去の「高尚」な音楽を鑑賞する「歴史的コンサート」などは、元来、「民衆」とは一線を画した「教養」ある「市民」のたしなみと位置づけられていたことである ³⁾。

ところで、クレッチュマーは自身の著書 *Musikalische Zeitfragen* (1903) の中で、音楽芸術の発展は音楽的な「Volk」によって担われると記述している。しかし、ドイツの「Volk」が誰を指示しているのかは、詳細な検討が必要となる。例えば小原 (2005) は、近代ドイツにおける「Volk」概念の歴史の変遷を検討する中で、「Volk」が多様な用法で用いられていることを具体的に示している。小原 (2005) によれば、本来

Volkは「国民」、「民族」、「民衆」、「人民」、「庶民」などの意味合いをもっており、その内実が同時代的な文脈においてどのように理解され、そこにどのような思想があったのかという問いを有している（小原、2005, p.81）。

したがって、クレッチュマーの記述にみられる「Volk」も一義的に捉えるのではなく、文脈に即して解釈する必要がある。本稿では、クレッチュマーの記述の中で「Volk」が上流階層のいわゆる「教養ある人々」に対する「民衆」を示しているのか、あるいは「民衆」や「教養ある人々」を包括したドイツの「国民」全体を示しているのかを整理することによって、音楽育成に関して「国民」全体に共通していたものと、「国民」の中でも特定の人々に対して求めていたものを整理することができると思う。

以上より本稿では、クレッチュマーの記述にみられる「Volk」が、「民衆」を指しているのか、あるいはドイツ「国民」全体を指しているのかを整理することを通して、誰に対して、どのような音楽育成を行おうとしたのか、その特徴を明らかにすることを目的とする。史料としては、クレッチュマーが当時の学校教育および社会一般における音楽育成の双方の課題を記した著書 *Musikalische Zeitfragen* (1903) を扱う。

II *Musikalische Zeitfragen* (1903) にみられるクレッチュマーの音楽観

1. 19世紀のドイツ音楽の重視

まず、*Musikalische Zeitfragen* にみられるクレッチュマーの音楽観として、本書が執筆される以前の19世紀のドイツの音楽家に絶対的な権威を認めていることに着目したい。

「…19世紀は、我々ドイツの偉大な時代に属する。ベートーベン、ウェーバー、シューベルト、メンデルスゾーン、シューマン、ワーグナー、リスト、ブラームスの名前は才能を修得した熟練の総体であり、それに同時代に達している国はドイツの他にない。」(Kretzschmar, 1903, S.3)

次に、音楽育成についても、「古い時代の方が、音楽育成における豊富さと細かさの点で我々よりも優れていた」(a. a. O., S.5) と、古い時代のものが優れていると記している。クレッチュマーによれば、ドイツ人はこれまでドイツほど音楽的に恵まれている国はないと思っていた (a. a. O., S.4)。しかし、それは過去のことになりつつあり、その優位性は脅かされているという。

「16世紀以来、最高度の水準を維持することに慣れてきた我々ドイツ人は、長きにわたって世界中から称賛されてきたドイツの巨匠の地位が空席になっているのを見て狼狽し、我々の国際的な地位、我々のコンサートホールやオペラハウスが、スラブやラテン民族との競争にさらされているのを見て憤慨するが、ただ憤慨してみてもはじまらない。」(a. a. O., S.6)

以上のようなドイツ音楽に対する危機感が *Musikalische Zeitfragen* 執筆の背景にはあった。クレッチュマーは音楽をめぐる問題として、音楽思想、音楽環境、音楽制度などに関する課題を本書に記した。

2. 「奉仕する芸術としての音楽 (die Musik als dienende Kunst)」の重視

クレッチュマーは、音楽を「奉仕する芸術としての音楽 (die Musik als dienende Kunst)」と「自由芸術としての音楽 (Die Musik als freie Kunst)」の2つに区分している。前者は、音楽以外の目的に従うもので、公的生活や市民生活に順応しているとされる。後者は、音楽の芸術作品があらゆる外的な関心から解放され、純粹にそれのみで作用する (a. a. O., S.103)。クレッチュマーによれば、2種類の音楽の間にアンバランス (Mißverhältnis) が生じ、「自由芸術としての音楽」があまりに高く評価され、「奉仕する芸術としての音楽」があまりに低く評価されている (Ebd.)。クレッチュマーは、この2つは同等ではなく、「奉仕する芸術としての音楽」を優位におくべきであるという見解を示した (a. a. O., S.103-104)。なぜなら、絶対音楽というものではなく、音楽は生まれながらの補助芸術 (geborene Hilfskunst)⁴⁾ であり、昔から何かに依存し何かを活気づけるよう指示され、音楽外の基盤や土台に支えられているからである (a. a. O., S. 118-119)。

このように、「奉仕する芸術としての音楽」の優位性と関連して、クレッチュマーは声楽音楽の優位性についても主張している。

3. 声楽音楽の優位性

クレッチュマーは、器楽音楽が優位となり、声楽音楽が軽視されている現状に問題があると述べている。

「ワーグナーや、他の分別ある専門家は、純粹器楽音楽を過大評価しないよう警告したが、その効果はなかった。その優位は、ベートーベンによって確実のものになり、今日の音楽家の大多数は声楽音楽を第二級の芸術とみなしている。」(a. a. O., S.117)

クレッチュマーによれば、コンサートにおける器楽音楽の優位はまだ明白には作品を害してはいないが、聴衆は害されている (a. a. O., S.119)。そのため、コンサートは正しい道を見失っている (a. a. O., S.116)。クレッチュマーが声楽音楽を優位においたのは、音楽と精神生活を結びつけることが出来るのは声楽作品であると捉えていたためである。それゆえ、「歴史的な発展に逆らって、我々はコンサートにおける声楽音楽を再び普及しなければならない。…家庭、共同体での音楽的な生活の新たな動きを呼び起こすことが大事である」(a. a. O., S.120) と述べられている。

以上のクレッチュマーの音楽観をおさえた上で、以下ではクレッチュマーが誰に対して、どのような音楽育成を行おうとしたのか、「Volk」概念を視点として検討していく。

Ⅲ *Musikalische Zeitfragen* (1903) にみられる「Volk」概念の検討

1. 民衆 (Volk)

まず、ドイツの「国民」全体という意味ではなく、その一部の人々を指示していると捉えられる「Volk」について検討する。例えば、*Musikalische Zeitfragen* には以下のような記述がみられる。

「Volk や、上流社会の音楽育成においては、多方面にわたってしばしば誤った道を歩んできた。これまで、奉仕する芸術を非常におろそかにしてきたせいで、資産のない階層は音楽的に困窮し、重要な栄養源 (Nährquellen) は、音楽それ自体に心を閉ざしている。」(a. a. O., S.128)

上記引用では、「Volk」と上流社会に属する人々が区別して記述されている。ここでの「Volk」は、「資産のない階層」、つまり「下級身分」に属する人々であり、それゆえに「音楽的に困窮」し、音楽にふれることが困難な人々を指している。さらに、Volk が下級身分を示している記述をとりあげたい。

「Volk による補充なしに芸術は成り立たず、健全に保つことができない。音楽が欠けると、Volk は心の内でその損失に悩む。…下級身分の人々が粗野になり、教会の影響力が衰退することは、下級身分の音楽への愛の減少と関係がある」(a. a. O., S.31)。

ここで説明されているのは、音楽の損失に悩む Volk、すなわち音楽にふれることができない Volk の現状である。同様に、音楽にふれる機会が少ない Volk の現状を表している記述としては、以下のものがある。

「Volk は、芸術を愛好する心や芸術への感覚をミュージアムやギャラリー、コンサートホールから受け取ることができず、通りや広場、教会で受け取らなくてはならない。…Volk はコンサートにいつも行けるわけではない。彼らが芸術にふれるのは通りや広場、教会である。」(a. a. O., S.103)

以上のような Volk は、ドイツのあらゆる人々を示す意味での「国民 (Volk)」ではなく、「国民」の中でも音楽芸術にふれることが困難であった「民衆 (Volk)」を指していると捉えられる。クレッチュマーは、このように音楽にふれることが難しい「民衆 (Volk)」の存在を言及する中で、国民学校 (Volksschule) における音楽授業の重要性を述べている。

着目すべきは、「民衆 (Volk)」の音楽育成の話題から国民学校の唱歌授業の課題へと話題をシフトする際、クレッチュマーの Volk 概念が、下層の「民衆 (Volk)」に限定されていたものから、ドイツの「国民 (Volk)」全体を対象としたものに転換されているということである。

2. 国民 (Volk)

まず、クレッチュマーが国民学校の唱歌授業の課題をどのように捉えていたのかを整理する。

(1) 国民学校の唱歌授業の課題

国民学校の課題として、唱歌の授業方法の根本的な改善が求められている (a. a. O., S.25)。それは、従来行われていたような方法、すなわち見本を聴き、聴いたとおりに楽譜なしで歌うことを制限し、学習や訓練をすべて音程・リズム・音符の知識や明確な音の概念の理解におくというものである (Ebd.)。

クレッチュマーは、見本を真似て歌ったり、歌を聴いて覚えるのではなく、楽譜から音を読み取り正確に歌うような授業に変更するよう求めた。なぜなら、学校は唱歌授業を通して子どもが自立できるように徹底して教育しなければならないからである (a. a. O., S.26)。クレッチュマーは、基礎の上に築かれた体系的な授業が子どもの役に立つと述べ、以下のような説明を加えた。

「コーラルや歌曲について、生徒にささやかな基礎をしっかりともたせ、その後、いつでも苦勞なくそれらを伸ばしていけるようにしておかなければならない。…その際、知識の叩き込みや歌唱の単なるメカニク的な活動であってはならない。」 (Ebd.)

以上より、国民学校の唱歌授業では、音楽的な知識や技術をしっかりと身に付けさせ、自立して音楽活動に携われるようになることを目指したといえる。クレッチュマーによれば、体系的な唱歌授業を導入するという新たな動きは、長い間注意を払われないうままであったが、ようやく 1881 年に重要な変化が訪れた。それは、イギリス人であるハラー (J. Hallah) が、イギリス議会に提出したヨーロッパの学校唱歌授業についての報告書の中で、ドイツにきわめて低い成績をつけたことに起因する。「そこで我々は、学校唱歌において、あまりに長く、古い栄光や実績をあてにしていたこと、そして今こそ学校唱歌の現代的な方法論を探す時になったということに気づいた」 (a. a. O., S.28) のである。

ハラーの一件以来、国民学校の唱歌授業を理にかなったもの、実りあるものにするために、すべての州が新しい条例を出し、楽譜を読んで歌う方法を導入することになった。しかし、その成果はまだ表れていない (a. a. O., S.28-29)。

以上、クレッチュマーは国民学校の唱歌授業について、子どもが自立して音楽活動を展開できるだけの基礎を確立すること、そのために楽譜を読んで歌う方法を取り入れることを強調する中で、それがまだ達成できていない現状を指摘した。

(2) 「国民 (Volk)」と音楽芸術との関わり

それでは、音楽的な基礎を養ったドイツの「国民 (Volk)」は、どのように音楽と関わるべきとされたのだろうか。まず、クレッチュマーは、「真の音楽芸術 (Tonkunst) は、学校教育なしでは達成できない」 (a. a. O., S. 31) と明記していることに着目する。ここから読み取れるのは、学校教育を通して教育された「国民 (Volk)」が真の音楽芸術を担うという見解である。同様に、「民衆」といった一部の人々ではなく、「国民」全体で音楽芸術を担うことを示した見解として、以下の記述に着目したい。

「作品の発展は、結局のところ、おそらく Volk や国家の音楽的な力に決定的な影響を受ける。優れた土壌において作品は自ら成長する。干からびた土壌においては、偶然育った大きな才能もわずかにしか成長しない。」 (a. a. O., S.7)

「音楽作品は、Volk の音楽文化における素晴らしい成果であり、Volk の精神にとって重要なものである。」 (a. a. O., S.6)

ここでさらに、「国民 (Volk)」が担うとされた「音楽芸術」の内容についての検討を加える。クレッチュマーがいう「真の音楽芸術」は、前述したように、声楽音楽を中心とした「奉仕する芸術としての音楽」であったと捉えられる。このことを確認するために、先に引用した以下の記述に再度着目したい。

「Volk や、上流社会の音楽育成においては、多方面にわたってしばしば誤った道を歩んできた。これまで、奉仕する芸術を非常におろそかにしてきたせいで、資産のない階層は音楽的に困窮し、重要な栄養源は、

音楽それ自体に心を閉ざしている。」(a. a. O., S.128)

上記引用における Volk が「民衆」の意味であることはすでに確認した。ここでは、「民衆」および「民衆」とは区別される上流社会の人々、すなわち「重要な栄養源」となる人々も、共通して「奉仕する芸術」を愛好することが求められていることを確認しておきたい。同様に、ドイツの「国民」全体が「奉仕する芸術としての音楽」を愛好すべきであるという見解は、以下の記述から確認できる。

「…今日の素朴な Volk (Naturvölker) だけでなく、文化的な Volk (Kulturvölker) のもとでも、奉仕する芸術としての音楽の優位は当然のものと考えられる。」(a. a. O., S.104)

この引用からは、まず Volk の中に「素朴な者と文化的な者」がいるとクレッチュマーが明記していること、さらに彼らに共通して「奉仕する芸術としての音楽」を愛好するように求めていることが確認できる。

以上、クレッチュマーは「民衆」を含めたドイツの「国民」全体に対して、音楽の基礎的な知識や技能を習得させること、それによって音楽芸術、すなわち声楽音楽を中心とした「奉仕する芸術としての音楽」を愛好するようになることを求めていることを整理した。

次に着目したいのは、「民衆 (Volk)」とは区別された「教養ある人々」の存在である。それは上記引用の中で、「文化的な国民 (Kulturvölker)」と表現されている人々に該当する。

3. 民衆 (Volk) とは区別される「教養ある人々」

Musikalische Zeitfragen では、以下のように「教養ある人々」についての記述が多くみられる。

「非常に多くの教養人 (Gebildete) が、音楽に無関心であるか、軽蔑的な態度で向き合っている。」(a. a. O., S.11)

「高度な教養をもつ者 (Hochgebildete Männer) は、詩や造形芸術のことはよく知っているが、音楽にはまったく疎遠である。」(a. a. O., S.12)

「高貴な教養層 (die Kreise edelster Bildung) において、音楽を愛好する心情が新たに低下していることは明白であり、納得がいく。」(a. a. O., S.14)

「バッハ協会、ヘンデル協会、レーヴェ団体、ワーグナー団体は、純粋に有効な企画である。しかし、教養あるドイツ界 (die gebildete deutsche Welt) が音楽から離れているという不安が生じている。ドイツの教養ある人々が音楽から離れないように配慮することが緊急の課題である。」(a. a. O., S.37)

「ギムナジウムが唱歌授業を拒否したことによって、学識と教養ある階層 (die gelehrten und gebildeten Stände) が音楽に目を向けないということが起こっている。…偶然、ギムナジウムの唱歌活動が権利を行使しているところでのみ、合唱団は実り豊かな活動をすることができる。」(a. a. O., S.36)

彼らは、「国民 (Volk)」の中でも、音楽にふれることが難しい Volk、すなわち「民衆」には該当せず、上記のように「教養ある人々」として「民衆」とは区別して記述されている。ここで、クレッチュマーが彼らに指摘している問題について整理しておきたい。

まずクレッチュマーが指摘しているのは、「教養ある人々」が音楽に目を向けず、音楽から離れてしまっているという問題である。上記の引用をみても、「教養ある人々」が音楽に関心を向けなくなったことを問題と捉えていることは明白である。クレッチュマーは、「教養あるドイツ (das gebildete Deutschland) において、音楽を愛好するという考えは主流であるが、それを過大評価してはならない」(a. a. O., S.11) と述べた。なぜなら、「我が国の学識ある人々の中で、音楽への理解や興味が明らかに失われている」(a. a. O., S.11-12) からである。

以上より、「国民 (Volk)」の中に、「民衆 (Volk)」とは区別された「教養ある人々」の存在と、彼らの問題点として音楽への関心がなくなっていることを確認した。次に、彼らが音楽に関心がなくなっている原因として、ギムナジウムの問題が言及されていることに着目する。

(1) ギムナジウムの唱歌授業に関する課題

ギムナジウムの唱歌授業が有する問題としては、音楽を愛好する心情を育てることに関して、以前よりもその役割を果たしていないことが指摘されている (a. a. O., S.33)。かつてのギムナジウムでは、ラテン語学校の授業のために古典に曲をつけた合唱曲を歌ったりすることで、音楽を愛好する心情を育てていた (Ebd.)。

次に、ギムナジウムの唱歌授業の問題として「免除」があげられている。当時、声変わりの間は喉を守るために、あるいは病気など身体的な事情を考慮して、唱歌の授業を受けなくても良いという制度があった。クレッチュマーはその問題点について、以下のように指摘している。

「本当に「免除」は必要なのだろうか？青少年がそのように長い間歌唱を中断しなければならないならば、どうして古い学校合唱は存在できていたのだろうか。どうしてトーマス教会少年合唱団や十字合唱団が存在できていたのだろうか。「免除」は廃止されなくてはならない。」 (a. a. O., S.34)

さらに、従来のギムナジウムの長所について、「かつて、いたるところで実践されていた学校合唱 (Schulchor) を通して、ギムナジウムはあらゆる面からみて音楽的であった。無意識的に、学生は豊かな音楽的空氣を吸い込んでいた。…合唱をする生徒の影響を受け、ヘンデルやホルツバウワー、シューマン (一般的に有名な作曲家の名前だけをあげるが) は音楽家になった。」 (a. a. O., S.33-34) と述べている。

クレッチュマーは、「ギムナジウムの唱歌授業は、最も重要な音楽時事問題のひとつである。ギムナジウムでの唱歌授業は、高度な教養 (höhere Bildung) と音楽の関係を含むものである」 (a. a. O., S.37) と明記し、「国家や社会のトップに立つ人々、あるいは牧師や若者を育てる教育者がドイツの音楽芸術に関心を持ち、敬意を払わないならば、偉大な作曲家が何の役に立つだろうか」 (Ebd.) と述べている。

(2) 「奉仕する芸術としての音楽」の重視

次に、「教養ある人々」が音楽に関心を向けなくなった原因として、「奉仕する芸術としての音楽」をおろそかにしてきたことをクレッチュマーが指摘していることに着目したい。このことは、先に引用した以下の記述から確認できる。

「Volk や、上流社会の音楽育成においては、多方面にわたってしばしば誤った道を歩んできた。これまで、奉仕する芸術 (die dienende Kunst) を非常におろそかにしてきたせいで、資産のない階層は音楽的に困窮し、重要な栄養源は、音楽それ自体に心を閉ざしている。」 (a. a. O., S.128)

このように、「民衆」とは区別された「上流社会」に属し、「重要な栄養源」である人々が、音楽それ自体に関心を向けなくなっているのは、「奉仕する芸術」をおろそかにしてきたせいであると指摘されている。その理由としては、以下のように「奉仕する芸術としての音楽」を程度の低いものとみなしてきたことがあげられている。

「大多数の音楽家は、奉仕する芸術としての音楽を一段低いものとみなし、自分をもっと高尚な音楽に携わっているのだと思い込んでいる。…それは、ドイツにおいて長い間イタリアや他国の音楽が一段低いものとして軽視されていたのと同じ構造である。もし、教養ある音楽家 (der gebildete Musiker) が根本的にターフェルムジークやガーデン・コンサートを拒絶するならば、それは間違いである。それらの音楽は、優れた理念にもとづいているのであるから、それに見合った実践が求められる。」 (a. a. O., S.109)

さらに、上記引用からは、クレッチュマーがターフェルムジークやガーデン・コンサート、すなわち、従来「教養ある人々」に娯楽音楽とみなされていた音楽の価値も認めているという点も特徴としてあげられる。しかしクレッチュマーは、従来「娯楽音楽」とみなされていた音楽の価値を全面的に受け入れているわけではない。

「中都市、小都市では今日でもヴィルトオーゾコンサートが支配的であるため、再び偉大な音楽芸術を提供することはなお難しい。この状況のもとで、ドイツ音楽は安心することができない。」 (a. a. O., S. 116)

「祖父の代までは、ヴィルトオーズ音楽で満足していた。しかし今日は違う。」(a. a. O., S.124)

このように、「ヴィルトオーズ」に対する「音楽芸術」という意識があることが確認できる。そのため、プログラムについても、「コンサートのプログラムが優れていることの意義は、徐々に批判や専門家によって認識されている。プログラムの良さは、聴取者にもたらされる諸作品の精神的な関連にある。それは、優れた趣味 (Geschmack) の簡単な要求である。」(a. a. O., S.122) と述べ、音楽作品が聴衆の精神に働きかけるものであることを説明している。

(3) ギリシア的な音楽のエートス論の重視

次に、「教養ある人々」の質を向上させるために、ギリシア的な音楽のエートス論についてクレッチュマーが言及していることを整理する。

まず、クレッチュマーは「(高貴な教養層が) 音楽を愛好する心情を低下させていることは、音楽芸術を解さない俗物根性 (Banausentum) の増加と足並みがそろっている」(a. a. O., S.14) と述べ、音楽的営みが、明晰、真実、信頼という方向を向くならば、音楽の支持者の質は向上し、高度な教養のある人々 (die Kreise der höhern Bildung) が音楽を避けることはなくなると説明している (a. a. O., S.14-15)。

そのような状態にたどり着けるのは、音楽の性質全般に対して、現在よりも正しい基本見解が浸透したときのみであり、そのため、音楽の性質や本質について適切で品格ある根本思想をもつことが必要とされた (a. a. O., S.15-16)。

そこでクレッチュマーが着目したのが、ギリシア的な音楽のエートス論、すなわち音楽の有する倫理的な作用に関する教説であった。クレッチュマーは、ギリシア的な意味での音楽的人間は深い思いやりをもっていると述べ、以下のような説明を加えた。

「正と不正についての問題も、道徳についての問題も、(ギリシア的な意味での) 音楽的人間はためらうことなく正しい方を選ぶ。すなわち、音楽的な才能があり、優れた教育を受けた者は、自然と魂 (Seele) が高貴になる。音楽は、ある程度まで卑しい者をそうでなくなるように整え、出自の卑しさを補い、教養 (Bildung) の不足を取り除くことを助ける。」(a. a. O., S.20-21)

しかしその成果は、音楽の正しい使用と正しい理解にかかっており、音楽教育の際には、「いかなる場合も音楽の中の精神的要素を前面に出し、精神的要素を全体的にも個々の音の詩においてもみつけることを教えなければならない」(a. a. O., S.22) とされた。これらは、音楽を通した人格陶冶に関わる記述であり、従来いわゆる「教養市民」に求められていたものである。

以上、「国民 (Volk)」の中でも「民衆 (Volk)」とは区別された「教養ある人々」の課題として、音楽に関心を示さなくなった現状が指摘されていることをみてきた。さらに、その現状を改善するために、クレッチュマーは、ギムナジウムでの音楽授業の在り方を改めること、および「奉仕する芸術としての音楽」を優位におくこと、さらにギリシア的なエートス論のような音楽による人格陶冶の機能を重視していたことを整理した。

IV *Musikalische Zeitfragen* (1903) にみられる音楽育成の特徴

本稿では、*Musikalische Zeitfragen* において、Volk が「民衆」を指示しているのか、あるいは「国民」全体を指示しているのかを視点として、「誰に対して、どのような音楽育成を行おうとしたのか」を整理してきた。

まず、クレッチュマーは「国民」の音楽的な基礎力の底上げをすることを目指していた。それは音楽の基礎的な知識や技能を形成し、自立して音楽活動ができる「国民」を育成するための教育であった。そのような力を養った「国民」には、声楽音楽を中心とする「奉仕する芸術としての音楽」を愛好することが目標として定められていたといえる。

しかし、「国民」の中でも「民衆」と「教養ある人々」の音楽育成の課題を整理すると、それぞれの課題は異なるところに重点がおかれていた。まず、「民衆」の音楽育成の課題は、音楽にふれることが難しい状

況にあった。それに対して「教養ある人々」の課題は、音楽に向き合っていないこと、関心をもっていないことにあった。そのため、「民衆」に対しては、特に国民学校での教育の必要性を強調し、音楽の基礎的な力を養うことで、自立して音楽活動ができること、それによって音楽芸術の発展を支えることが期待された。一方、「教養ある人々」に対しては、音楽に関心をもたせるために、従来「高尚」とみなされていた音楽以外の音楽の価値も認めさせようとした。しかし、特徴的であるのは、「教養ある人々」に対しては、ギリシア的なエートス論による音楽の機能、すなわち音楽による人格陶冶の機能が強調されていた点である。したがって、「教養ある人々」は、「民衆」よりも高いレベルで音楽と関わることを期待されていたといえる。以上より、クレッチュマーは、ドイツの「国民」全体に声楽音楽を中心とした「奉仕する芸術としての音楽」を愛好するという共通の目標を示した上で、「教養ある人々」にはより高度な課題を提示したといえる。

本稿では、クレッチュマーがドイツの「国民」全体に共通の目標を提示した上で、「民衆」や「教養ある人々」といった社会的な集団に特化した音楽育成をめぐる課題と改善策を提示していたことをみてきた。「国民 (Volk) がドイツの音楽芸術を担う」ことを求めたクレッチュマーの改革であるが、その際「国民 (Volk)」に期待された役割は、属する社会的集団によって差異があったといえる。

(附記) 本研究は、JSPS 科研費 (16K17458) の助成を受けたものである。

注

- 1) 詳細は、拙稿「H.クレッチュマーの音楽教育改革の特質を捉える視座－「学校音楽教育」および「学校外での音楽育成」を視点として－」『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』第 62 巻、中国四国教育学会、2017、pp.666-671。
- 2) 同上。
- 3) 詳細は宮本直美『教養の歴史社会学』岩波書店、2006。
- 4) 「補助芸術」という訳はトゥルンマー (2007) を引用した。

引用・参考文献

- ・上山典子「クレッチュマーの音楽解釈学－『楽堂案内』よりブルックナーの交響曲解説を中心に」『東邦音楽大学紀要』第 15 巻、2005、pp. 79-93。
- ・小原淳「近代ドイツにおける「フォルク」概念の歴史的変遷－法的・政治的主体としての「フォルク」概念の成立と有機体論の展開－」『史観』153、pp.79-96、2005。
- ・トゥルンマー、S.「音楽解釈学を考える」『近代』98、2007、pp.1-34。
- ・ヘルムス、S.、シュナイダー、R.、ウェーバー、R.編／河口道朗監修『最新音楽教育事典』大空社、1999。
- ・Böhme, T.: Wege von der Kunst zur Wissenschaft. Herman Kretzschmars Wirken in Leipzig, in : *Hermann Kretzschmar Konferenzbericht Olbernhau*, Gudrun Schröder, 1998, S.41-56.
- ・Braun, G.: *Die Schulmusikerziehung in Preußen : von den Falkschen Bestimmungen bis zur Kestenberg-Reform*, Bärenreiter, 1957.
- ・Freitag, S.: Hermann Kretzschmar als Förderer der deutschen Schulmusik, in: *Hermann Kretzschmar Konferenzbericht Olbernhau*, Gudrun Schröder, 1998, S.185-192.
- ・Heller, K.: Das Rostocker Jahrzehnt Hermann Kretzschmar, in :*Hermann Kretzschmar Konferenzbericht Olbernhau*, Gudrun Schröder, 1998, S.57-78.
- ・Kafurke, R.: *Zur Geschichte der Schulmusikerziehung in Preußen von 1918 bis 1930*, Der Wilhelm-Pieck-Universität, 1945.
- ・Kretzschmar, H.: *Musikalische Zeitfragen : zehn Vorträge*, Peters, 1903.
- ・Nolte, E.: *Lehrpläne und Richtlinien für den schulischen Musikunterricht in Deutschland vom Beginn des 19. Jahrhunderts bis in die Gegenwart*, Schott, 1975.
- ・Pfeffer, M.: *Hermann Kretzschmar und die Musikpädagogik zwischen 1890 und 1915*, Schott, 1992.
- ・Sommer, H.-D.: *Praxisorientierte Musikwissenschaft Studien zu Leben und Werk Hermann Kretzschmars*, Musikverlag Emil Katzschler, 1985.